

テアトロ 9月号

「中西和久氏の一連の発言に対する全国演鑑連の立場」

高橋 武比古（全国演劇鑑賞団体連絡会議 事務局長）

『テアトロ』6月号に中西和久氏による「『しのだづま考』上演をめぐる」なる文章が掲載されました。全国演劇鑑賞団体連絡会議に対していわれなき中傷をしている部分もあります。事実経過を知らない読者に誤解を招くこともあると思いますので、この文で全国演鑑連の立場を明らかにします。

います。1962年の全国組織結成以来、一貫して平和で文化的な社会と日本演劇の民主的発展に寄与することをその目的としてきました。

全国会議の場での中西氏からの質問・抗議など、この間の一連の問題に関して全国幹事会は4月8日付で「見解」を公表しました。この「見解」は個々の鑑賞会内に周知させるための内部文書的な扱いをしてきたこともあり、多くの方の目に触れるものではありませんでした。全国演鑑連の立場を明らかにすることを目的とするならば、この「見解」の内容に尽きていると思いますが、その後の状況の変化もありますので、「見解」の内容に補足した文章を表すことで、改めて全国演鑑連の立場を表明します。

そもそも、今回の問題の発端は、新劇製作者協会主催のシンポジウムの席上で全国演鑑連が運動理念として掲げてきた「日本演劇の民主的発展」と「差別発言」との整合性についての中西氏の質問からでした。

その翌日に開催された全国演鑑連の研究集会の席上でも同様の質問がなされましたが、「差別発言」そのものの事実関係があきらかでない以上、演劇鑑賞運動と「差別」は相容れないものであり「いかなる差別にも反対する」ものであるという立場を述べるにとどめました。そして、その場で約束した通り、当該ブロックを通して事実経過を訊くことにしました。そこで明らかになったのは、件の中西氏の発言が問題にしているのは、その時点から十数年前の出来事だったということでした。なぜ十数年前の「発言」が今問題になっているのか。また現在に至るまで当事者の間では「問題解決」のためにどのような話し合いが行われてきたのか。いくつかの疑問を持ちながらも、この時点では、事実経過を明らかにすることを第一にしていました。ところが「差別発言」した本人は、そのような発言はなかったと言っていることが明らかになりました。

当事者の会話の中で実際に「差別発言」が行われたかどうかについては、そもそも本人たちの問題であり、全国演鑑連としてはそのことに対し何らかの事実確認をするべきものではないと考えています。このように、実際にあったかどうか分からない「差別発言を前提とした質問には、今後も答えられないというのは自明のことではないでしょうか。

全国演鑑連を構成する演劇鑑賞団体は、芸術文化に関わる運動体として、演劇鑑賞という行為を通して人間性を高めることを一つの目的としており、差別や暴力といった人間性を貶める行為は、私たちの運動と相容れないものだと考えています。このことは中西氏が参加している全国会議の場でも繰り返し述べてきました。

中西氏は、私たちが答える必要のない回答を執拗に求め、満足のいく回答が得られないと、差別発言した者を容認しているとして、私たちが差別を助長している団体であるという謝った認識を不特定多数の人々に広げているのです。

私が全国会議の場で、「会議に対する侮辱だ」と言ったことに対し、さも被害者であるかのように中西氏は振る舞っています。

演劇鑑賞会の全国会議は、その都度あらかじめ議題を提起し、その上で参加を呼びかけています。劇団側の参加者についても、そのことはまったく同様に、演劇鑑賞運動をより発展させる立場で一緒に会議を構成しているものと考えます。演劇鑑賞運動を現場で担っている全国の仲間が、時間と経費をかけて集まっている貴重な会議の場で、私たちが答える必要のない質問を繰り返すことは会議の妨害でしかありません。そして、当の本人が「そのような発言はしていない」と明言した後も、議題を無視し繰り返す妨害発言に対し「会議への侮辱である」という思いを表明したのです。私の発言は、その場に参加していた人たちには共感を持って迎えられました。決して「差別問題」に対して真摯に向き合っているという姿勢を批判したつもりは毛頭ありません。このことは明らかにしておきます。

中西氏はその後も「差別発言」があたかも存在したかのような発言を繰り返し当事者を誹謗中傷する印刷物を演劇鑑賞会の例会会場周辺で配布するといった行為に及んでおり、このことに対しては全国事務局長として断固抗議したいと思えます。